

「おさしづ」第6巻における本部事情と「道」

『おさしづ改修版』第6巻(明治35～40年)の本部事情における「道」の用例を整理する。第6巻には本部事情の「おさしづ」が42件ある。そのうち、「道」が用いられるのは25件、3回以上「道」が繰り返して用いられるのは15件である。

この時期は、天理教の一派独立の請願が繰り返して行われた時期であり、「道」が用いられる「おさしづ」は、そのことにかかわる伺いが多くなっている。

この道というものは、幾年経っても付けにやならん

一派独立請願の先長い道のりを予見してか、「付け掛けた道」あるいは「この道の掛かり」と言われている。

「道という道は、付け掛けた道やによって、何でも彼でも、幾年掛かっても付けにやならん。……この道というものは、幾年経っても付けにやならん。成らん中から、天然という道あちらに一寸、こちらに一寸、道の固まり出け掛けたる。一時にどうしても出け難い。そこ手遅れと言う。成っても成らんでも通らにやならん道やで。……この道の掛かりは、先ず一代という、どうでもこうでも不自由難儀の道通らにやならん。不自由の道通るは天然の道という。神の望む処である。」(さ35・7・13 御供の件に付昨日東京へ出張の松村吉太郎より申し越されしに、内務省の局長の御話には金米糖は絶対に廃止せよとの御話である。若し出来ざる時は製造の方法に対し、腐敗せざるよう出来ざるものか、と言うに付、心得までに願)

このように、「掛かり」、つまり最初のうちは、なにかと不自由することも多いと言われる。しかし、その中から、あちらこちらに道がつきかけている。思惑どおりいかなからと別の形や方法に変えるのではなく、その中を神にもたれ、踏ん張って通ることを促され、そうすれば自ずと成ってくと説かれている。

通りよい道と通り難い道

同じような文脈で、通りよい道と通り難い道を対比させて、心の治め方を論される「おさしづ」が複数みられる。

「もうこれだけの道と言え、大きき道は怪我をする。細い道は怪我は無い。大きき道で怪我はある。細い道は怪我は無い。細い道は怪我は無いというは、危ない〜という心を持ちて通るから怪我は無い。世界何の心掛けずして通れば、どんな怪我あるやら知れん。これだけこれだけ道付いてあるのに、こういう事では、と、心細いと思う。なか〜そやない程に〜。」(さ35・7・20 過日のおさしづより一人も残らず願出よ、との事に付願／引き続いて)

「さあ〜通りよい道は通りよい。通り難い道は通り難い。通り難い道ある。これだけ順序の道に論し置こう。情に流れなよ、と言うた日ある。情に流れて了てからどうもならん。……通りよい道は通りよい。通り難い道は通り難い。細道は通りよい、往還道は通り難い、と言うてある。」(さ37・3・29 教長御上京の時内務省宗教局長より金米糖御供の事に付種々話しの結果、洗米と改め下付する事一同協議の上願／押して、洗米に替えさして頂きませ願)

「紋型無い処から順序追うて来たる道。難しい事望んで、難儀苦勞さす道を付けたのやない。ほのかに論して居るやろう。理は一つに纏まりてくれにやならん。皆々よう聞き分けてくれにやならん。道という、道は楽の道は通りよい、難しい道は通り難い。難しい道の中に味わいある。」(さ37・8・23 日露戦争に付、天理教会に於て出征軍人戦死者の子弟学資補助会組織致し度く願)

一見すると、大きい道、往還道は通りやすく、細い道は通りにくいように見える。しかし、実際には、細い道は一層心掛けて通るので通りやすく、大きい道や往還道は油断しやすく、怪我もしやすい。こうした論しは、天理教会が設置・拡充される頃に繰り返されていたが(第1巻)、その後しばらくはほとんどみられない。第6巻におけるように、一派独立運動が本格化するこの時期に、再び同じような言葉で、一見通りやすそうな道を目指すのではなく、細い道でも、着実な歩みを進めるように論されている。

道を伝えてくれにやならん

その歩みを進める際の心の治め方について、次のように説かれている。

「一人々々の心以ちて、道を伝えてくれにやならん。どれだけ十分これだけ十分と思う心は間違うてある。よう聞き分け。もう着るもの無けにや、もう無うても構わん〜。美しい物着たいと思う心がころりと違ふ。……さあ皆その心なら、案じる事は無い。世界から力入れて来ても、真実教、真実の心あれば、抜いた剣も鞘となる〜。抜いた剣が鞘となるというは、真実神が受け取りたるから、心膽治まる。」(前掲、さ35・7・20 過日のおさしづより一人も残らず願出よ、との事に付願)

「一人々々の心以ちて、道を伝えてくれにやならん」と言われる。この「道を伝えてくれ」というのは、道をもっと人に伝えてくれという意味ではない。一人ひとりが真に教をたよりに、道をつたい歩んでくれ、ということである。そうすれば、親神がその真実を受け取ると教えられる。

飯降伊蔵本席による最後の「おさしづ」には、「おさしづ」が伝えられてきた20年が振り返られている。

「二十年の間ほんの聞いただけにて、目に見ゆる事無しに來た。二十年の間言うて置いたる事出て來たる。道の者皆見て知って居るやろう。これだけ一寸知らし置こう〜。皆々惣々思案無くばならん。皆々力無くばならん。」(さ40・6・9 昨日分支教会長普請の事に付会議を開き、本席の御身上も普請の上から御苦しみ下さる事でありますから、部下教会長一同わらじの紐を解かず一身を粉にしても働かさして頂き、毎月少しずつでも集まりたるだけ本部へ納めさして頂く事に決め申しました、と御返事申し上ぐ)

「おさしづ」で説かれてきたことは、「道の者皆見て知って居るやろう」と言われる。翻ってみれば、「道の者」なら説かれてきたことを、よく知っているべしということになるだろう。そこから皆が思案し、身に行うことを、「道の者」に期待されているのである。